

山本隆志著

『新田義貞―関東を落とすことは子細なし―』

工藤 大輔

本書は、「ミネルヴァ日本評伝選 武将と合戦」というシリーズのうちの一冊で、著者は筑波大学人文社会科学科教授の山本隆志氏である。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 新田氏の家系

第二章 長楽寺再興の政治ドラマ

第三章 新田義貞の鎌倉攻め

第四章 鎌倉滞在

第五章 建武政権下の新田義貞

第六章 一三三六年の戦況と政局

第七章 北国経営の途絶

おわりに―歴史としての義貞

この構成からも分かるように、本書は「義貞が各段階の政治情勢にどのように向かいあい、どう行動したか、その解明に努力したい」（はじめに）とするように、いわば政治史として扱おうとする意図を読み取ることができる。

まず、第一章では、新田氏の家系について述べられている。このうち、

新田本宗家から分かれた家筋で、さらには足利の血筋が一族である岩松氏に関して多くの分量を割いている。この岩松氏は、以降の叙述のなかに度々登場する。なかでも、足利尊氏との関係において、おなじ新田一族であっても義貞とは対照的な道を歩み、建武二年（一三三五）には足利氏と主従関係を結ぶことになる（第五章）。その意味においては、長楽寺との関係も含め、第一章は全体の導線的な役割を担っているように思う。

第二章は、正和年間（一一三二—一七）にあったという長楽寺の火災からの再興をめぐる政治史を中心に述べられている。なかでも、新田一族にとつての「氏寺」長楽寺に対して、その再建過程で北条高時が長楽寺の住持の任命をするなど影響力を強めていった。これにより両者に生じた緊張関係が新田氏挙兵の契機とみるところはまさに「政治ドラマ」であろう。

また、本章では、火災前の長楽寺の門前町の復元、さらには、世良田の有徳人についても述べられている。

第三章は、本書の中で最も分量を割いている章で、新田義貞の挙兵から鎌倉幕府の滅亡までの合戦の経過を時系列に即しながら述べている。

ここでは、義貞の挙兵の大義となる護良親王の令旨の再検討を試み、さらには挙兵の日時・場所にも言及している。

また、本書の視点である政治史、とりわけ「武士には武士の担う政治的次元があったはず」（はじめに）という問題意識の現れとしてか、「倒幕軍の性格」という一項目を設け、足利千寿王・岩松氏・千葉貞胤・結城宗広の動きを追っている。これらの武士たちは、それぞれの状況

判断により挙兵におよんだことが明らかにされている。このうち、新田一族では、世良田義満は義貞に同道せず世良田に残り千寿王を支え、岩松氏は足利尊氏と強い連携があったという。著者はこうした倒幕軍の状況を「カオス状況」と評している。

第四章は、倒幕後、元弘三年（一三三三）八月初旬の上洛までの義貞が鎌倉に滞在していた期間について述べている。ここでは、軍忠状・着到状への証判者の分析を行い、新田一族の大館幸氏・氏明が、義貞の軍勢とは離れて軍事行動を行っていた可能性を指摘する。また、義貞の証判に据えられた大きな花押から、源氏新田氏の地位を表現しようとしていると読み取る。

また、ここでは足利氏との確執について述べていくなかで、両者の政治力の違いが明らかになってきたことを述べ、鎌倉滞在中の義貞の「政治プラン」に疑問を呈している。

第五章は、上洛後の義貞が建武政権内で武者所を統括する役割を担い、また、播磨・越後・上野の国司として国務に関わっていたことについて述べている。このうち、越後については、義貞が守護も兼ねており、目代・守護代も新田一族で構成されており、軍勢催促もしていた。新田氏が越後での影響力をもつようになったことが、後の「北国政治圏構想」（第七章）に関わってくる。

また、北条時行の乱を契機として、一族である岩松氏が足利氏と主従関係に入ったことにより、新田氏惣領として、さらには源氏嫡流の家柄として足利尊氏と対決することとなったという。ここで、尊氏追討軍を率いた義貞軍のエピソードとして、『太平記』『梅松論』から天龍川渡海

の逸話を取り上げている。この逸話は、義貞の武士としての名誉と恥、さらには主従の思いやりといった南北朝期には崩れつつあった武士の姿勢を、あるべき姿として強調したものであると評する。

第六章は、建武三年（一二三六）の京都とその周辺、および播磨国などで合戦と、後醍醐の京都還幸を中心に述べられている。京都とその周辺での合戦が初めてとなる義貞は、畿内の寺社への所領寄進などが少ないなどということもあり、衆徒・神人系の勢力をうまく組織編成できず、結果として後醍醐方全軍の指導者としての立場を失っていたと述べる。

また、後醍醐の京都還幸は、義貞らの越前下向と一体の動きとして理解されるものであり、これによって義貞を中心とする新田一族、さらには武家勢力は分裂したという。

第七章は、本書では第三章に次ぐ分量が割かれている章である。ここでは、まず義貞軍の越前下向のコースを検討している。義貞らは当初から敦賀を目指していたのではなく、越前国府を目指していた。しかし、越前国府での戦況が思わしくないという状況が伝えられたために、コースを変更し敦賀に向かったのだという。敦賀が選ばれた理由の一つは、日本海海運の要衝であり、新田氏の影響力がおよぶ越後と結んでいるからであった。

また、敦賀で義貞は、越前と越後とを政治的に結びつけ、さらには越後から上野国へと政治圏を拡大し、奥州の北畠・結城らと結ぼうと構想していたという（「北国政治圏構想」）。この義貞の政治構想は実現はされなかったが、東国で義貞の二男義興らに継承されることになった。

さて、本書の特色は、「軍忠状などの一次史料をできるだけ優先し、『太平記』とは距離を取ろうとした」（「あとがき」）ということにあると思う。しかし、一方では、第二章6『『太平記』の描く鎌倉合戦』として一項目を立てたり、第五章での天龍川渡海の逸話など、『太平記』を読み解きながら、当時の武士像の一端に迫っている。史料、史書をいかに読むべきか大変教えられた。

さきにも触れたように、本書の視点に「武士の担う政治的次元」というものがある。ここで、義貞の政治力に関する記述をいくつか拾ってみることにしたい。

まず、倒幕後、鎌倉で過ごした二か月について、「義貞にとつて政治上重要な時期が、政治的成果を生むことなく過ぎたのである」（一三二ページ）という。また、鎌倉の戦後処理に関しても、「義貞はどのような政治プランを持って、鎌倉にいたのか。鎌倉の寺院・寺社勢力に対してどのような基本態度でいたのか、史料にも、史書にも、見えないのである。（中略）鎌倉を本拠として武士を糾合する政治勢力を形成する可能性はあったと思うが、そうした動きは見えない」（同右）という。

さらに、義貞が任官したころには「三十三歳であれば、物事を判断する力、一族や武者を統括する力、それと権勢者との距離のとり方などに熟していたであろうが、この後の義貞の行動を見ると、そうした面があまりうかがえない。（中略）政治世界での訓練を経ないように見える」（一三七〜三八ページ）とある。北条高時の霊の鎮魂についても足利尊氏の「政治的見識」と義貞のそれは極めて対照的でもある（一七〇〜七三ページ）。

一方、義貞は、鎌倉滞在中に、軍忠状の証判を与え、源氏新田氏の地位を表現しようとするなど「武士大将の名誉ある行為」（二八五ページ）には熱心であった。また、関東育ちであることから鎌倉武士を理想とする傾向にあり（二〇五ページ）、「合戦は鎌倉以来の武家の仕事であるとの観念があるようで、武士主従の恩愛には身につけたものがうかがえる」（二八六ページ）という。

つまり、新田義貞という人物は、鎌倉武士を理想とし、自らが武士大将であるという自覚はあるものの、政治的な力量にはいささか欠けているということになるか。そのような義貞が最後に描いた「北国政治圏構想」には、義貞のどのような「政治的次元」が働き、彼を突き動かしていたのだろうか。

以上、本書の第一章から第六章の簡単な紹介と、書評というよりは私の感想文となってしまう。そして、何よりも私自身の不勉強が災いし、誤読・誤解を含めて十分に著者の意図するところを汲み取れたかどうか非常に心許ないところである。この点おわび申し上げたい。

（四六判、三〇二頁、ミネルヴァ書房、二〇〇五年十月刊、二三一〇円）

（くどう・だいすけ 青森市史編さん室非常勤嘱託員）